

4-3			
主題	人生最後の時間を大切に。全力で支援する		
副題	「ここで過ごせて良かった」と感じて頂くために私達ができること		
ターミナルケア	チームケア	研究期間	6ヶ月

法人名	社会福祉法人多摩済生医療団		
事業所名	特別養護老人ホーム 多摩済生園		
発表者：丸山真里子・村山裕理	アドバイザー：佐々木祐子		
共同研究者：川崎悠子・松尾友美・石井貞子・竹野栄二・赤坂敬子・山崎みどり			

電話	042-343-2291	FAX	042-342-2900
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設は、昭和52年に東京都小平市の緑豊かな敷地内に開設されました。利用定員は多床室棟94名・ユニット棟60床・ショートステイ9床となっています。ご利用者一人一人のかけがえのない人生に「添う心」を理念としてサービスを発想・展開・改善し、ご利用者が本来の自分でいられる場の構築に最善を尽くしております。
------------------	--

<p>《1. 研究前の状況と課題》</p> <p>当施設では設立時より看取る事は当たり前に行ってきた。ただし、そこでのターミナルケアは、体位交換や整容、ベッドサイドに写真を飾るなどの基本的なものにとどまっていた。一般的にターミナルケアが認知されていく中、介護保険の改正でもターミナルケアの充実が求められており、「その人らしい最期を迎える」という考えを更に施設内で浸透させる必要があった。</p> <p>《2. 研究の目的ならびに仮説》</p> <p>①ターミナルケアの質を向上させる事。 ②職員がターミナルケアの重要性、必要性を理解する事。 ③ご家族、ユニット職員、看護職員、栄養士、訓練職員、相談員等がターミナルケアについて共通の意識を持つ事。 ④職員は、対象者のみならず、揺れ動く家族の気持ちも理解したケアを心掛ける事で、チームケアの重要性を理解し、更に個々の介護観の成長に繋げ、日々のケアを充実させる事。</p>
--

<p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>○事例1 体調が急激に悪化した利用者のご家族より、「母は納涼会（施設のお祭り）が大好きで…。でも、今年はもうあの太鼓の音は聞けないと思う…。なんとか太鼓の音だけでも聞かせてあげられれば…。」と話されていた。そこで、夏祭りの前にユニットの行事として、他のご利用者やご家族、いつもお願いしている納涼会の太鼓のボランティアさんにも参加を呼び掛け、ミニ納涼会をユニット内で開催、ご本人に太鼓の音を聞いてもらう事が出来た。</p> <p>○事例2 介護職、医療職、相談職等スタッフ全員で対象者のこれまでの生活歴、人生歴、ケース記録を再確認した。また、職員一人一人が今まで対象者と関わってきた中で、対象者への思いを話してもらう。その思いをまとめる中で、職員として何が出来るのか、何をしたいのかを具体的にしていって。「その日の出勤スタッ</p>
--

フは対象者の所へ挨拶と声かけに行く。眠っていたら手を擦るなどのスキンシップを積極的に図る」「娘様の思いを代弁する」「夕食時、調子の良い時は晩酌する」「園芸が好きだったのでベッドサイドに花を飾る」「野球が好きだったのでボールを握って頂く。また職員が野球のユニフォームを着てご利用者に関わる」等があがった。これをもとにご家族とのカンファレンスを実施。ご家族に職員側からの思いを伝えると共にご家族からも思いや気持ちを聞き、職員・ご家族とも対象者への思いを共有。ケアプランを更新し、対象者の人生を支えるケアにあたることになった。

・職員へのグリーンケア

対象者の最後を看取った後、ユニット内で死後カンファレンスを実施した。今回の事例で学んだ事、反省点、課題、次に繋げられる事等の意見を出し合った。

・ご家族へのグリーンケア

四十九日に合わせて、施設内で生活されていた時の写真を添え、ご家族へ手紙やメッセージを送らせて頂いた。

○ターミナル委員会

職員がターミナルケアに対し、どのようなイメージを抱いているか確認する為のアンケート調査を実施。その結果は、寂しい、暗い、孤独と言った答えやターミナルケアに当たる上で、どのように関われば良いのか分からない、自信が無いなど、多くの職員が不安感を抱いている事が分かった。この不安感を無くす為に職員全体会で研修会を開催、またマニュアルを見直し周知徹底を図る様にした。

《4. 取り組みの結果》

1の事例では、自然な雰囲気、地域の方も巻き込んだターミナルケアを提供ができた。2の事例ではフロア内で共通の認識を持っていた事によって、対象者に対する思いが一つになり、それぞれが最善のケアを提供しようと努力した。実際に職員が野球のユニフォームを着てケアにあたった時、対象者は声を発する事は出来なかったが目を細めて微笑んでいた。ご家族に

も笑みがこぼれ、張り詰めていた空気が暖かいものとなった。一丸となって取り組んだ思いとケアがご家族にも伝わり、また忙しいなか泊まりがけで付き添われるご家族の思いが職員にも伝わった。それは対象者に対し、より心のこもったケアに繋がった。死後カンファレンスを行った事により、職員の看取りに対する充実感と次への課題を確認する事が出来た。また、ご家族のグリーンケアを行った事で、ご家族から思いのこもった感謝の手紙を頂くことができた。委員会活動では、アンケートをもとに研修会やマニュアルを見直し、施設全体でターミナルケアの重要性を共有する事ができた。

《5. 考察、まとめ》

今回対象者への思いの集約となったターミナルケアの数々は、出来る限り実行に至ったが、中には職員の自己満足や思いの押しつけになるのでは、と思われたものもあった。しかし、実際に行ってみるとそのケアは対象者やご家族への思いが溢れるものとなった。どのようなケアであっても対象者を大切に思う気持ちとご家族の心情に配慮したものであればターミナルケアとして皆に有効であると感じた。これらの取り組みを通りして、少しずつ職員の意識が変わってきている。ターミナルケア委員会を主体に施設における看取りケアをより充実したものとしていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認、本研究発表以外で使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

介護施設におけるターミナルケア
鳥海 房枝 著
雲母書房 出版

《8. 提案と発信》

ターミナルケアは特別な事ではなく生活の延長線上にある。誰にでも訪れる当たり前の事ではあるのだが、どのような意識を持ち、日々対象者やご家族に関わっていくか。思いを共有し積み重ねていけるかで、人生最後の時が変わってくると思う。そこに日々のケアやターミナルケアの醍醐味を見出せるようにしていきたい。